

[研究ノート]

バルザックのユダヤ人

鈴木正昭

- 〈目次〉 ヨーロッパのユダヤ人
フランスのユダヤ人
『人間喜劇』とユダヤ人
グランデとゴブセック

ヨーロッパのユダヤ人

紀元70年、エルサレムはローマ軍により包囲された後、神殿に火が放たれ灰燼に帰した。この敗戦によりユダヤ人は祖国を失った。その後バル・コフバの反乱が鎮圧され、ユダヤ人の離散（ディアスポラ）は決定的なものになった。

世界各地に散らばったユダヤ人のうち、イベリア半島に渡ったユダヤ人は他の住民同様市民権を付与され、信教の自由も認められた。その後、西ゴートがイベリア半島を征服後カトリックに改宗すると、ユダヤ人に対しさまざまな制限が加えられるようになった。やがて彼らは奴隷の地位にまで落とされた。そのため一部のユダヤ人はイベリア半島を去った。

711年、イスラム軍が西ゴートを滅ぼし、半島を征服した。それに伴いユダヤ人は奴隷の地位から解放され、ユダヤ教の信仰も再び許された。やがて半島ではウマイア朝時代、とりわけアブド・アル・ラフマン3世（912-961）時代にイスラム文化は最盛期を迎えた。それと同時に当地のユダヤ文化も最盛期を迎えた。当時スペインにはおよそ30万人のユダヤ人がいたものと考えられている。

1212年になるとキリスト教徒がイスラム教徒をグラナダ以外の土地から追放した。キリスト教の支配する時代になってもしばらくの間ユダヤ人の境遇に大きな変化はなかった。しかし14世紀になるとユダヤ人に対する人々の感情は厳しいものになり、とりわけ1391年にはユダヤ人に「改宗か、さもなければ死か」の決定を迫る大暴動が起こった。そのためユダヤ人は国外退去か改宗のいずれかの選択を強いられることになった。国内に留まってキリスト教に改宗したものの中にも、本当に改宗したもの、見せ掛けだけの改宗者があった。

1492年にカスティリアのイザベラとアラゴンのフェルナンドの結婚後、異端審問所が創設された。疑いを受けた者は自白を強要され、改宗を受け入

れない場合は死刑になる場合もあった。その場合は公開の場での火あぶりの刑という厳しいものだった。

同年半島でのイスラム教徒の最後の拠点だったグラナダが陥落した。いわゆるレコンキスタの完成である。それに伴いイザベラとフェルナンドはすべてのユダヤ人に4ヶ月以内にスペインを立ち去るよう布告を出した。ユダヤ人たちは隣国のポルトガルに逃れたけれども、それもつかの間の立ち寄り先にすぎなかった。ポルトガルでもやがて異端審問が開始されたからである。ユダヤ人たちはやむなくギリシャ、トルコ、北アフリカ、イタリア、オランダなどに逃れた。その中ではオランダに逃れたものが最も多かった。オランダでは早くから信教の自由が確立されていたからである。ユダヤ人たちは主としてアムステルダムに住み、折から盛んになった海外貿易の分野でオランダの経済発展に大きな貢献をした。アムステルダムの株式取引所や東インド会社の設立にはいずれもユダヤ人が深くかかわっていたといわれる。

一方イベリア半島以外のヨーロッパへのユダヤ人の進出はドイツのラインラント地方が多かった。彼らはエルサレムへの立ち入りは禁止されたけれども、ローマの市民権は保持していた。ただ392年にキリスト教がローマ帝国の国教になると、ユダヤ人およびユダヤ教への風当たりが強くなった。やがてユスチニアヌス法典が制定されるとユダヤ人の権利は大幅に制限されることになった。

彼らは商業と金融業に従事するものが多かった。商業の場合同じヘブライ語を話す人々が各地にいたことが彼らの強みになったのは皮肉な現実である。また金融業というのは主として高利貸しである。これは後にユダヤ人の強欲の象徴としてしばしば取り上げられ彼らユダヤ人を懲らしめるための正当性を与えるために利用されることもあった。しかし、これは大きな誤解に基づいていると言わねばならない。なぜなら当初キリスト教徒には利息を取って金を貸すという行為が禁止されていたからである。そのため職業選択の幅のきわめて狭かったユダヤ人でも金融業の世界に生計の手段を求めることができたのである。後にキリスト教徒も高利貸しになることが認められるよ

うになるとキリスト教徒の高利貸しも多数輩出した。したがって高利貸し＝ユダヤ人という等式は成立しないのである。高利貸しから派生した職業としては古物商と不動産屋があった。

ドイツを中心とする地域では宗教に関しては自由が認められていた。キリスト教徒とユダヤ教徒はそれぞれ住み分けを行っていたけれども、当初は後のゲットーのように厳密なものではなかった。

1095年ローマ教皇ウルバヌス2世はエルサレムの聖地をイスラム教徒から奪回するよう各国に訴えた。それに応じて十字軍が編成されたのであるが、兵士たちはパレスチナに行かずに、ドイツ各地に住むユダヤ人を襲い、略奪、殺害を行うものも少なくなかった。1144年、1189年の十字軍の際も多くユダヤ人が犠牲になった。このとき十字軍兵士たちはたまたま、いわば行きがけの駄賃にユダヤ人を襲ったわけではなかった。その証拠にイスラエルに行く場合はライン河の上流方向へ進むべきところを下流方向へ進軍し、シュパイエル、ウオルムス、マインツ、ケルンなどのユダヤ人集落を襲撃している。この際改宗を拒めば女子供であっても殺害された。抵抗を試みたユダヤ人も多勢に無勢で最後は自らの家屋に火を放ち、自害したと伝えられる。これがこの地域でのユダヤ人迫害の始まりだった。ユダヤ人は世界各地に離散すると同時に迫害を受け始めたように我々は漠然と思っているけれども、この地域では今日までの二千年間のうちの最初の千年間はそれほど大きな迫害はなかったことは注目に値する。

1215年になると第4回ラテラン宗教会議でキリスト教徒とユダヤ人の共存が厳しい規制の対象にされた。14世紀のペストの大流行の際、ユダヤ人に対する迫害は頂点に達した。ユダヤ人が井戸に毒を放り込んだのが病気の原因であるというデマのためである。なにやら関東大震災の折の「朝鮮人が井戸に毒を放り込んだ」というデマに基づいて多くの朝鮮人が殺害された事件を思い出させるような話である。命永らえたユダヤ人たちの多くは中欧、東欧へ逃げた。これらドイツからの移住者たちの使用言語が有名なイディッシュ語であるが、正確に言えばイディッシュ語はドイツに残ったユダヤ人のし

しゃべる西イディッシュ語と中欧、東欧のユダヤ人のしゃべる東イディッシュ語に分類される。そのうち東イディッシュ語は20世紀初頭には1100万人もの使用人口を誇る大言語だった。今日ではその使用人口は激減しているが、その最大の原因がナチスによる大量殺人であることは言うまでもない。

ペスト大流行の際に迫害を逃れたユダヤ人が最初に住み着いたのはポーランドだった。当時西欧に比して遅れていたこの国では新来のユダヤ人は新しい技術により国を豊かにしてくれる頼もしい人々として歓迎された。ユダヤ人はそこにシュテトウルという集落を作って住んだ。ひとつの集落の人口規模は1000人から2000人くらいだった。

しかし1648年にコサックの反乱が起こり多数のユダヤ人が殺害された。次いで列強によるポーランドの分割の結果ユダヤ人はロシア国内にも居住するようになった。しかしロシアはユダヤ人にとってポーランドほど居心地のいい国ではなかった。ユダヤ人は居住地を限定された。アレクサンドル2世の統治下ではこれらの条件はやや緩和されたけれども、皇帝暗殺後新たに帝位についたアレクサンドル3世の時代になると再び弾圧が強化された。このころからボグロームと呼ばれる反ユダヤ暴動がしばしば起こり、そのたびごとに多くのユダヤ人が殺害された。そのため19世紀末からは西欧やアメリカへの移住者が激増した。とりわけアメリカ合衆国への移住者は1880年から1920年の間に200万人もの多数を数えた。

ドイツに残ったユダヤ人の中からも17、18世紀になるとイギリス、オーストリア、デンマークなどのユダヤ人同様大きな力を持つ特権商人が現れるようになった。

フランスのユダヤ人

西欧のユダヤ人の中ではフランスに住む人々が最も早く完全な平等を手に入れた。フランス革命後の1791年の国民議会は当時フランスに居住していた4万人のユダヤ人のすべてに完全な市民権を与えた。その他の国々でも同

様の動きが見られたけれどもナポレオンの失脚後、元の状態に戻ってしまった国々が多かった。その中ではオランダだけが例外だった。

フランスでは1789年8月26日、「人権宣言」によってそれまで都市に居住することのできなかつたユダヤ人たちの都市への移住が可能になった。ユダヤ人はそれまで土地（農地を含む）の所有が認められていなかっただけ身軽な移動が可能だった。バルザックはこうした変化を見逃すことなく『人間喜劇』に取り入れた。

ところでバルザックとほぼ同時代のロマン派の作品ではユダヤ人は高利貸し、強欲なベテン師として扱われる場合が多かった。

ただしユダヤ人といっても女性はこうした規定からは除外されていた。彼女たちは作家にとって聖書時代の女性たち同様のオーラと魅力を保持し続けていた。そしてバルザックの作品においてもこうした見方はある程度踏襲された。バルザックから百年後のサルトルもその著『ユダヤ人』の中で「ユダヤの美女」という言葉には特殊な性的な意味が込められていると指摘している。

『人間喜劇』ではユダヤ人は主として『風俗研究』および『私生活情景』、『パリ生活情景』に登場する。彼らは主としてドイツから移住してきたユダヤ人たちである。

『人間喜劇』に登場するユダヤ人男性の支配的な職業は銀行家と高利貸しである。ヌシンゲンとかゴブセック、ケラーという名前を挙げれば十分であろう。それ以外にマギュス、ハルペルソーン、ナータンという名前を付け加えれば『人間喜劇』におけるユダヤ人の占める地位が決して小さなものでないことは直ちに了解されるだろう。

フランスに居住するユダヤ人のうちポルドー地域のユダヤ人はセファラードと呼ばれた。彼らは1492年に異端審問を逃れるためスペイン、ポルトガルからやってきた人々である。強制的に改宗させられた彼らは隠れキリシタンのようにひそかに自らの宗教を守っていた。1550年にアンリ2世は彼らに移動と商業の自由を与えた。しかし彼らが宗教上の自由を獲得するには

1723年を待たなければならなかった（ルイ15世の時代）。

アヴィニオンの法皇領内のユダヤ人たちは当時法皇とフランス王フィリップ・ル・ベルとの対立のため、王の迫害を逃れて法王領内に逃げ込んだ人々だった。彼らは1791年に法王領がフランスに吸収されるまで領内に留まった。吸収によって彼らは名実ともにフランス人になったのだった。それ以前は法王や町の有力者の意向に左右されがちな生活を余儀なくされたし、ユダヤ人であることを示す黄色い帽子の着用を義務付けられていた。法王領内のユダヤ人の中にはこうした制約を嫌い、ラングドックやプロヴァンスに移住するものもあった。

アルザス・ロレーヌおよびその近辺にもユダヤ人が居住していた。これはウエストファリア条約（1648年）の結果、同地域がドイツからフランスに割譲されたことによる。この地域のユダヤ人に対する扱いは他の地域よりも過酷だった。革命以前ユダヤ人は3リーブルの通行税を払わなければストラスブールに入ることができなかった。しかもそれは日中だけに限られた。

18世紀末になるとユダヤ人たちはパリに集まってくるようになった。ただしどこにでも住めたわけではなく、アルザス・ロレーヌからやってきたユダヤ人は「マレー地区」に、ボルドー方面から来た人々は「カルチエ・ラタン」に住むことが義務付けられた。

フランス革命後、ユダヤ人に自由が与えられたといってももちろん一片の法律だけですべてが解決されたわけではなかった。それは「公民権法」があっても人種差別がなくなるというアメリカの現状を見るだけで十分であろう。

一部の地域ではかえって以前よりも差別がひどくなったところさえあった。ナポレオン時代が到来すると、フランス各地のユダヤ人の代表を集めて会議を開催し、フランスの法律とユダヤ教の両立が図られた。ナポレオンの意図はユダヤの宗教をフランスという国家に従属させることにあった。またユダヤ人を「有用な」職業に就かせたり、愛国主義を鼓吹したりした。そしてラビたちが怠りなく任務を遂行しているかどうかを監視するために長老会議も作られた。また兵役も彼らの義務になった。

ナポレオンが失脚しブルボン朝の王政復古の時代になった。他のヨーロッパ諸国とは異なり、ナポレオンが失脚してもフランスではユダヤ人の扱いはほぼそのまま踏襲された。

7月王政以降ユダヤ人の人口は急激な増加を見た。フランス在住のユダヤ人は1791年に40,000人、1831年には60,000人、45年には85,000人を数えた。地方からパリにやってくるユダヤ人も多かった。その結果大革命以前わずか500名にすぎなかったパリに居住するユダヤ人の数は帝政時代に2,000人、1840年になると8,000人、さらに53年には20,000人になった。バルザックが活躍していた時代には大体数千人から1万人くらいのユダヤ人がパリに居住していたことになるわけである。

新たにパリにやって来たユダヤ人の中ではアルザス・ロレーヌ方面からの移住者が多かったといわれる。

ロスチャイルド、クレミュー、ジャヴェルら有力なユダヤ人およびその家族がパリを居住地に定めたのも1810年から30年の間だった。

大革命以前ユダヤ人は店舗を構えることができなかった。そこで彼らは市場で物を売ったり、行商人になったり、古物や古着を商ったりするものが多かった。

東方からやってきたユダヤ人の中には高利貸しをしていると非難されるものがあった。

実力をつけ始めたユダヤ人に対しては反感も公然と表明されるようになった。ボナールやフーリエがその急先鋒だった。ボナール（1754-1840）は熱烈なカトリック復古主義の主唱者で、啓蒙思想とフランス革命の精神の敵対者で、王権と教会の権威を弁護した右派の代表的な論客。当然ながらルソーの社会契約論やモンテスキューの三権分立論とは相容れなかった。フーリエはいわゆる空想的社会主義の提唱者として有名な思想家である。彼は一面においてユダヤ人と敵対する側面があったことは確かであるが、同時にその思想の含む「企業家精神の正当化」は多くのユダヤ人をひきつけたといわれる。

彼ら保守派の論客の言説は社会的に一定の影響力を及ぼし、高利貸しであ

と思われたアルザスの貧しいユダヤ人に対する攻撃を引き起こした。しかしそれは地域の特殊な事情が原因だった。過密な人口による土地不足のため狭い耕地の拡大を希望する農家も多かったのであるが、この地域には銀行がなく銀行から金を借りられなかった、という事情である。そのため農民たちはユダヤ人の高利貸しを頼らざるを得なかったのである。ここで再度注意を促しておきたいのは高利貸しを営んでいたのはユダヤ人に限らないということである。ただユダヤ人は職業選択の余地が限られていたので高利貸しの中で占める割合が高くなり、目立ってしまったのである。したがってユダヤ人がまったく居住しない地域にはフランス人の高利貸ししかいなかった。

アルザスのユダヤ人についての記述を残したデスバックというストラスブール大学の教授によれば、ユダヤ人の大多数は極貧の生活を強いられていたにもかかわらず、フランス人による略奪の被害をこうむることがあったが、その場合でも損害賠償を請求することもできず、泣き寝入りをするのが多かった。

ユダヤ人たちは1806年の勅令により職業選択の余地は法的には拡大したけれども、ユダヤ人だからという理由で就業を拒否されることも多かった。

しかし、産業革命の進展に伴い、こうした傾向は徐々に改善されていった。とりわけパリではこうした傾向は顕著だった。ユダヤ人が軍事、科学、教育といった分野にまで進出してきたことは早くも1826年にバンジャマン・コンスタンが指摘している。こうした境遇の変化に応じてユダヤ教を捨てるユダヤ人も多くなっていった。

1840年になると「ユダヤ人はフランスに吸収され、ほぼ消滅した」と主張する議論まで登場するほどだった。ユダヤ人の中からもフランス社会への同化に積極的な者も現れたけれども、同化に熱心になればなるほど周囲のフランス人の不信を買う場合もあった。同化を志向したのは主として知識階級に属するユダヤ人たちだった。

一方庶民階級やプチブルに属するユダヤ人は商売のみを切り離し、ユダヤ教の教えは保持するものが多く、フランス社会への同化という点では遅れ

た。彼らは自らをフランス人である前にユダヤ人であると公言し、ユダヤ教こそが自分たちの文化の最重要な要素であると考えた。

両者の間には中および大ブルジョアジーに属するユダヤ人グループがあった。彼らはユダヤ教に深く帰依していたけれども、徐々にそれを守り続けることに困難を覚え始めてもいた。

こうした信仰や心情と社会的な活動との折り合いをどのようにつけるかという試みは1825年のサン・シモン主義者の運動にも見出されたが、この運動ではユダヤ人が大きな役割を果たした。これは個人の道徳に基礎を置く従来のキリスト教に対し社会的な道徳に基づく新たなキリスト教を対置させるものだった。個人の能力差を是認し、それぞれの能力に合わせて分配を受ける仕組みである。この組織を作るために実業家、学者、芸術家の意見が求められた。彼らは新たな時代が工業化した社会になることを洞察していた。スエズ運河の掘削という大事業もこの運動の中から生まれたといわれる。

この運動に参加したユダヤ人たちはユダヤ教の特殊性から脱却し自らの企業家精神を正当化する場所を見出した。彼らの運動は結局実を結ばなかったけれども、その運動の一部は実現した。1835年のパリとサン・ジェルマン間の鉄道敷設の計画である。

このころ社会は工業化の拡大期を迎えていた。生まれたばかりの資本主義社会でごく少数のイニシアティブに富むユダヤ人たちはこの変動する社会を好機として利用することができた。その代表がロスチャイルド家であることは言うまでもない。

ロスチャイルド家はもともとフランクフルトの両替商だった。この両替商が宮廷の御用商人となり、手形割引人となったことが後の隆盛の元になった。彼は息子たちをヨーロッパの主要都市に派遣して支店を開かせた。家族の結合の固さが繁栄の原因だったといわれるほど固い絆に結ばれた一族だった。ジェームス・ド・ロスチャイルドは1811年3月にパリにやって来た。3年後には銀行を開業し、1821年にはフランスにおけるオーストリア総領事に任命された。翌年には男爵位を与えられた。ナポレオン没落後の同盟国側

への賠償の窓口となり、1830年以降はルイ・フィリップの財産の管理人となった。

1840年にジェームスによって書かれた手紙からは彼が大臣よりも簡単に王と会見することができ、大臣の首を自分の言葉ひとつですげ替えることのできるほどの権勢をもっていたことがわかる。

しかしながらこうしてヨーロッパ各地に拠点を持ち、それぞれ大きな力を持つようになったため「コスモポリタンの陰謀」がささやかれるようになり、それは間もなく「ユダヤ人の陰謀」になった。ジェームスのあまりの権勢にアルフォンス・トウスネルは「ルイ・フィリップという名で支配しているのはロスチャイルドなのだ」と怒りをぶちまけたほどだった。

しかしユダヤ人の銀行はロスチャイルド家に限られたわけではなかった。プレール、アシル・フル、ワームズ・ド・ロミリーらである。もっとも他のユダヤ人銀行家たちは改宗してユダヤ教を放棄したものや、あまり熱心ではない信者が多かったのに対し、ジェームスやその兄弟たちは自らがユダヤ教信者であることを隠さなかった。

富裕なユダヤ人はユダヤ人全体のごく一部にすぎなかったのに「裕福なユダヤ人」というイメージがどんどん流布していった。リヨンでは1848年になっても半数は行商人、半数は小商店主にすぎなかった。この時代のユダヤ人は気の毒な人々であるか、マキアベリーの金融資本家のいずれかだったのである。

多くの人々はサロン等でこうした成功したユダヤ人実業家の話に喜んで耳を傾けていたが、貴族たちの中にはこうした「成り上がりもの」の台頭を快く思わない人々もいた。その代表格がシャトブリアンである。

バルザックはジェームス・ド・ロスチャイルドにも夫人のベティーにも面識があった。それどころか彼は同家のサロンの常連だった。ロスチャイルド家のことはしばしばハンスカ夫人宛の手紙に登場する。ロスチャイルド夫人が出産したとき、この出産にあまりお金がかかっていないことに触れ、「これらのユダヤ人は自分たちのすることのすべてからお金を稼ぐのと同じよう

に、しないことから稼ぐのだ」と語っている。この皮肉な調子には自分がなりたくてなれなかった大金持ちに対する羨望の念が込められていることは確かであるが、金に困るとしばしば同家から借金したこともまた事実だった。そればかりではなく、外国旅行に際しては信用状の発行まで依頼している。

さらに関係が続けていたブリュニョル夫人という家政婦との別れ話が原因で同夫人に脅迫された際にもバルザックはロスチャイルドの政治力を借りて問題の解決を図った。それでいながら私信では援助を受けたことを悔やんでいるのだから身勝手なものである。

しかしユダヤ人の急激な社会的上昇に対し人々が嫉妬と不安を感じるようになっていったことは事実で、それはやがて激しい反ユダヤ・キャンペーンになっていった。とりわけ1845年に鉄道がロスチャイルド家に譲渡され、別のユダヤ人の経営する鉄道で73名の死者を出す大事故がおけるとそれをきっかけに起こった反ユダヤ・キャンペーンはそうしたケースだった。

『ユダヤ人の王、ロスチャイルド』、『ロスチャイルド一世、従僕、人民』といったパンフレットがサタンという署名で出回り、やがてそれは各国語に訳されて全ヨーロッパに広がっていった。さらに前述のアルフォンス・トウスネルの『現代の王、ユダヤ人』というタイトルの1845年に刊行された著作はユダヤ人論の嚆矢となった。この人物はバルザックとはかなりの長期にわたって交際のあった人物で、バルザックにさまざまな話題を提供したり、猟の獲物を提供したりした。彼は狩猟の名手だったのである。しかし、この書物が刊行された時点では『人間喜劇』のユダヤ人はすでに登場済みであったからバルザックがその影響下にユダヤ人を造形した可能性は少ないものと思われる。

法的な同化の次には自らとフランス人の相違をフランス人に認識させ、受け入れさせるための戦いがユダヤ人を待ち受けていた。

ロマン派の文学ではユダヤ人女性は理想化された姿で登場することが多いけれども、それに比して男性のイメージはあまり芳しいものではなかった。

彼らは中世から抜け出してきたような姿かたちで登場し、金持ちで吝嗇な高利貸しである場合が多かった。同時に卑怯で頑固で、不気味な人物である場合も多かった。

ユゴアの『メアリー・スチュアート』では登場する高利貸しのユダヤ人を追い払った後、ファビアーニは一人のユダヤ人の欠点を、それがあたかも全ユダヤ人の欠点でもあるかのように並べ立てる。「うそと盗み、それがユダヤ人」、さらには「これは人ではなく、ユダヤ人なのだ」とまで言い切る。ケティー・キュプフェールはロマン派作家の作品（ユゴア、シャトブリアン、ラマルティーヌなど）からユダヤ人を取り上げた作品を検証し、それらが中世以来の因習的でステレオタイプなユダヤ人像から抜け出していないことを指摘している。

『人間喜劇』とユダヤ人

バルザックはそうした作家たちと異なり、ユダヤ人に対する偏見を克服した最初の作家である、と女史は指摘する。彼は同時代の社会の中にユダヤ人を据えて描こうとしたから因習や偏見から免れることができたのだと女史は考えている。

初期作品である『クロチルド・ド・リュジニャンあるいは美しいユダヤ人』という作品において、ネフタリーという青年主人公は従来の「醜いユダヤ人」をくつがえした「美しいユダヤ人」であり、従来のユダヤ人には付与されることのなかった純粹さとか勇氣といった美德を与えられていた。しかし最後にバルザックはステレオタイプに墮している。ネフタリーは毒物、汚れとされ、拳句の果ては「ユダヤ人から盗むことは犯罪ではない」などといってネフタリーから金を巻き上げた人物が弁護されてしまうからである。

しかしバルザックはユダヤ人がこうしてヨーロッパでさげすまれ、憎しみの対象となった理由を正確に理解していた。「天の怒りの重みにより押しつぶされたものと思われていたこの永遠の国家の不運な生き残りたちはあらゆる

る正義からも、あらゆる宗教からも拒絶された。彼らに哀れみをかけるものなどなかった。彼らはヨーロッパの不可触賤民だったのだ。(……) 彼らは世界を祖国に、不名誉をその刻印に、悪口と侮辱を養分に、レプラと憤りを仲間に、責め苦しさを慰めとしたのだ。」そして世人がユダヤ人に帰する犯罪を彼もまた非難しながらも、彼らがそうなのは「彼らがのけ者にされ、遠ざけられ、差別された犠牲者だったからだ」と今日から見てもほぼ妥当な認識を示している。

このようにユダヤ人の立場に理解を示したバルザックではあったが、彼には成功を収め、金と名誉を手に入れたという欲求も人一倍強かった。さらに彼の作家宣言に不安な家族、とりわけ母親を納得させるためにも、作品が広い読者から迎えられることが是非とも必要だった。

功をあげたためであろうか、彼はネフタリーが実はユダヤ人ではなくキリスト教徒の名門の出身であるという結末を用意した。そして家族の反対で彼との結婚を断念しようとしていたクロチルドは彼と結婚することができるというハッピーエンドの結末を迎えることになった。

こうした苦肉の策にもかかわらず、この作品もまたあまりはかばかしい世評を得ることはできなかった。ただ『演劇新聞』という新聞だけがこの作品をきわめて高く評価してくれた。しかしこの書評担当者はネフタリーが実はキリスト教徒だったという結末を不可とし、キリスト教徒の女性がユダヤ教徒の青年を愛するようにしたほうがよかったという評価を下したのだった。まるで彼の下心を見抜いていたかのごとき批評だった。

ところで『人間喜劇』の全登場人物2,472人のうち、外国人は250人で、およそ30人がユダヤ人である。ただし再登場人物460人のうち13人がユダヤ人である(ケティー・キューフェールによる)。

ここで再登場という場合、本人が直接登場人物である場合ばかりでなく、他の登場人物によって言及されたケースをも含めることとする。

そうするとユダヤ人の再登場人物は1) ジャン・エステル・ゴブセック
2) エステル・ゴブセック 3) ラウール・ナータン 4) フレデリック・

ド・ヌシンゲン 5) コラリー 6) ジョゼファ・ミラ 7) エリー・マギユス 8) ポーリーヌ・サロモン 9) フランソワ・ケラー 10) ゴベンハイム 11) ゴベンハイム・ケラー 12) サラ・ゴブセック 13) ウエルブルストである。

これらのユダヤ人の大半は『私生活情景』および『パリ生活情景』に登場する。彼らの従事する職業の第一に挙げるべきは銀行家と高利貸しという金にかかわる職業である。ヌシンゲンとゴブセックはそれぞれの名を持つ中編小説の主人公になっていることから、彼らの『人間喜劇』全体に占める重要性は理解されよう。

第二の職業分野は芸術と科学の世界である。作家であるナータンの名前がまず浮かぶ。彼は19編に登場する。これはヌシンゲンに次いで多い登場回数である。

科学の世界ではモイズ・ハルペルソンである。彼もまた、他の分野のユダヤ人登場人物同様、専門分野での卓越した才能にもかかわらず、金や権力に強く執着するという特徴を持っている。第三は職業というよりはむしろ階層としての庶民である。

『人間喜劇』に登場するユダヤ人女性は大きく二つに分類される。悪徳に惹かれる女性と美德によって特徴づけられる女性たちである。前者は娼婦と芸術家である。代表としてはエステル・ゴブセックとコラリーの名前が挙がる。芸術家は歌手ジョゼファ・ミラである。また美德の女性はノエミ・マギユス、ポーリーヌである。

1808年7月20日の勅令はユダヤ人たちに3ヶ月以内に姓を持つよう指示した。というのも従来ユダヤ人には姓は存在しなかったからである。通常は聖書からとられた名前にあだ名を組み合わせた呼称が用いられていた。そしてそれが徐々に実質的な姓として用いられるようになっていった。多くのユダヤ人はこれを役所に申請したといわれている。

バルザックの女性たちの名前はすべて聖書からとられていて、それぞれの女性のイメージは聖書から与えられるイメージに沿って造形されている。

『人間喜劇』ではユダヤ人男性は全体的に見てフランス社会に溶け込んでいるといえる。彼らはさまざまな職業に従事し、彼らの肉体的な特徴もそれぞれにふさわしい姿かたちを持っている。

バルザックは個人的にロスチャイルド家の当主をはじめ、子供たちの教育を担当するサミュエル・カーンらユダヤ人の知人を持っていた。その結果、ドイツやフランスに住むユダヤ人はいわゆるユダヤ人らしさを失い、ドイツ人やフランス人と区別がつけにくくなっているけれども、商売に巧みな点とその食欲さはわれわれとは異なっている、と考えていた。

しかし彼のユダヤ人像はハンスカ夫人を訪ねて東欧に旅をした際この地に居住するユダヤ人を目撃してイメージの変更を迫られかねないほど大きな衝撃を受けた。

「ユダヤ人の大群が私を取り囲みました。私が数えたのは25人まででした。みな神学生のように黒ずくめの服を着ていました。あごひげが日の光に輝き、目は紅柘榴石のように光っていました。私は杖で食欲な手を押し返しました。私の時計の鎖の重さ確かめ、本物の金かどうか触りたがったからです。この食欲さの暴発は私を身震いさせました。」

さらに「ユダヤ人は泥棒です。中国人と選ぶところはありません。」とか「ユダヤ人は大金であれば殺人でもたじろがない」という激しい反ユダヤ主義的な発言が見受けられる。この点に関しケティー・キューフェールはこの発言の一部分はバルザックのユダヤ教に関する無知に、また他方ではユダヤ人嫌いのハンスカ夫人への迎合に帰因するのではないかと推理している。

さらにはハンスカ夫人との結婚を熱望していたバルザックがロシア皇帝のご機嫌を伺うためにこうした過激な言葉を撒き散らしたのではないかもキューフェールはバルザックを弁護する。ロシア皇帝の反ユダヤ主義は周知のことだったからである。

『人間喜劇』のユダヤ人は彼が東欧で目撃したユダヤ人のように群れることなく、孤立している。そしてバルザックが好んだのもそうした、フランス人に同化したユダヤ人だったのである。

ところでイギリスで16、17世紀に大流行を見たユダヤ人の娘とその父親というカップルの話がフランスではバルザックの活動時期に流行していた。イギリスでの代表的な作品としてはクリストファ・マーローの『マルタの娘』、シェークスピアの『ヴェニス商人』、ウォルター・スコットの『アイヴァンホー』がある。これらに共通するのはキリスト教徒の青年に恋するユダヤ娘という構図である。このテーマは『人間喜劇』では『従兄ポンス』において採用された。

バルザックもこうした流行に便乗して同工異曲の作品を物したのであるが、時代の想像力やステレオタイプの思考に妥協して誠実で寛大な娘と醜く、欲深な高利貸しの父親という枠組みを踏襲することになった。ユダヤ娘も「永遠の婚約者」という宿命を免れることはできなかった。彼女たちはキリスト教徒の若者と愛し合うことはあっても、結婚までこぎつけるケースは皆無だった。このあたりにも当時のユダヤ人差別の一端がうかがえる。

バルザックの作品に登場するユダヤ人男性は二つのグループに分類される。一方は周りの羨望、嫉妬、憎しみを避けるため、外観を飾らない生き方を選択する。彼らはこうしてポグロームに遭遇した場合、異郷に脱出し、新しい土地での新しい生活のための資金を蓄えるのである。

もう一方は居住地域への融合を心がけるグループである。前者の例がマグユスやゴブセックであり、後者を代表するのがヌシンゲンであると大雑把に分類できる。彼らはみすぼらしい暮らしをするが、社会に同化するとこれ見よがしの大邸宅を建てたりして、自らの富を誇示し、それまでの習慣からの脱却を図るけれども、行き過ぎで周囲の輦轡を買うことになる。

『ヌシンゲン商会』と『セザール・ピロトー』の二つの作品でバルザックは新たに生まれた資本主義と従来の商売との対比を試みた（ジュルマ・カロー宛書簡）。

バルザックのユダヤ人金融家たちへの批判の種本はトウスネルである、とキュプフェールは考えている。ユダヤ人と銀行家というテーマについてもバルザックは彼を踏襲している。この人物は確信的な反ユダヤ主義者で、フー

リエ主義者でもあった。主著に『現代の王、ユダヤ人』があることは先に見たとおりである。

大革命以前、フランスではユダヤ人は専門的な技能を持っていなければ自らを認めさせることはできなかった。そしてバルザックこそはこの事実を指摘した最初の作家である、とキュプフェールは主張している。

ユダヤ人が社会的な承認を得るには金を持つことも必要不可欠の条件だった。これが最も手っ取り早い手段であった。彼らはそのためいっそう金儲けに励むのだが、それが同時に貪欲なユダヤ人というマイナスイメージを形成することになったのも当然の成り行きだった。

金持ちのユダヤ人というと誰もが思い浮かべるロスチャイルド家（ドイツ語ではロートシルト）の興隆のきっかけを作ったのはマイヤー・アムシェル・ロートシルト（1743-1812）だった。彼の5人の娘と5人の息子のうち息子たちはそれぞれロンドン、パリ、ナポリ、フランクフルトの店を任された。ロンドン、パリ以外の店はその後閉鎖に追い込まれたが、残った店はいずれもそれぞれの国で重きを成した。パリを任されたジェームスは先に見たようにブルボン家やナポレオン3世の財政顧問になった。バルザックと面識があったのはこの人物である。

グランデとゴプセック

ケティー・キュプフェールはゴプセックをグランデと、マギユスをポンスと対比させてユダヤ的特質を浮上させようと努めた。

グランデとゴプセックとは同年である。グランデはソーミュールの住民たちを搾取して財を成した。生涯生まれた村を出ることなく、その土地で生涯を終えた。そして彼の視野は村を越えることはなかったように思われる。それに対し、ゴプセックは世界を歩き回り、大きな危機を体験して、広い視野を獲得し、それを武器にパリの高利貸し業界に君臨した。

グランデは金（きん）がすべてであるという伝統的な吝嗇漢である。彼は

ひっきりなしに金製品を取り出しては、触っている。彼にはそれが肉体的な快樂なのである。金そのものが目的になってしまったため、所有することが最終的な目的になってしまったように見える。

ゴブセックにとって金は他人の運命を左右し、自らの人生の平穩を保障するための手段である。

グランデは心理的、抽象的な分析とは無縁の人物である。一方ゴブセックは冷静な観察者である。

グランデの黄金の探求は知性や推論能力を破壊してしまう。いわば金に侵食されてしまうのである。金はグランデには悪徳であるが、ゴブセックには情熱である。金はグランデを焼き尽くしてしまうのだが、ゴブセックは金を求めながらその支配からは自由である。作者はグランデを野生の動物にたとえている。彼は本能に支配されて獲物に飛びかかる。そのことが彼から節度を奪い、自己制御を不可能にしている。これに対し、ゴブセックは金を単なる金属として突き放して見ている。グランデにとり金は実体であるが、ゴブセックにはシンボルである。

グランデは娘や周囲を飢えさせても平気でいられるのに対し、ゴブセックは人間の悲惨をよく理解し、悲劇を前にしても動じない場合もあるけれども、時には寛大な行為をなすことのできる人物として造形されている。

両者の根本的な相違は二人の死の記述からうかがうことができる。グランデは理解力を完全に喪失し、金に対するほとんど動物的な反応を示した。臨終の際に差し出された十字架の値踏みをするかのようにルーペを差し出すことが彼のこの世における最後の行為だった。

ゴブセックは最後まで理解力と知性を失わなかった。彼は遺言を確認するため駆けつけたデルヴィルに自らの病名を告げることもできた。

グランデは貪欲と貧窮の中で生きた。ゴブセックは貧しい人間のように生きたけれども、それは彼が日常生活に無関心だったからである。彼の意図したのは必要な場合に強い意志と力を見せつけることができるように自らを構築することだった。

両者には物質的と精神的、粗野な本能と洗練された理性、ずるがしこさと知性という相違がある。

同様の対比はポンスとエリー・マギユスにも成立する。両者ともに美術愛好家で美術品や絵画の大収集家であるという共通点を持っている。ポンスは目利きで掘り出し品を見出す嗅覚を持ち、時間をかけて莫大な価値を持つコレクションをこつこつと築き上げた。二人の人物の絵画への熱狂ぶりはともに作者により「愛人が恋人を見つめるように絵画を見つめる」と共通の表現を与えられたことから明らかなように、その同質性が強調されている。

ポンスは美術品の購入に熱心なあまり自らの生活を破壊して食べるものにも事欠くほどの窮状に追い込まれる。挙句の果て彼は裕福な親戚を食事時に訪れ食を乞うところまで落ちぶれてしまった。彼は尊厳を失い、ホスト家庭の主人の言うことをすべてそのまま繰り返す「オウム」のような人間になってしまう。「彼はなんにでも微笑んだ。誰をも責めず、誰をも弁護しなかった。彼にはすべての人が正しかったのである。したがって彼はもはや人の部類には入らなかった。それはひとつの胃袋だった」という辛らつな評価を作家からくだされてしまうことになる。

マギユスは芸術家ではなく古物商だった。彼はゴブセックとも親しく、自らもユダヤ人だった。彼の絵画や美術品への耽溺ぶりはポンスと選ぶところはない。それは偏執狂的といっても過言ではなかった。しかし彼は同時に慎重な事業家でもあり、財政や投資の才に恵まれていた。したがって彼には熱狂はあっても破綻はなかったのである。

ポンスが自らの美術品収集家としての地位を社会的に承認されたいと考えたのに対し、マギユスはそれを求めなかった。彼は自らの人生を構築するための自らの能力に自信を持ち、自らの意思を持ち、また自らの衝動を抑制することができた。

ゴブセックもマギユスも大金を所有してはいたけれども、彼らの表面的な金への執着の背後には力の追求や保障を求める気持ちの持つ、呵責のない外見の下に慎み深く隠された寛大さや善意が隠されている。さらにエレヌ・

アルツサイラーという研究者は、「ユダヤ人の黄金趣味は二義的な特徴に過ぎず、あまり普通に見られることではない。ユダヤ人の本当の性質は思考、人間およびその行為への好奇心であり、もともとの傾向は物や存在の分析である」とバルザックのユダヤ人観を要約している。

ところでサルトルは『ユダヤ人』において次のように語っている。

「ユダヤ人は金を愛すると人は言う。しかし、集団意識は、ユダヤ人が金もうけに抜け目がないとはよく考えるが、それを、守銭奴というもう一つの民衆的神話と混同することはあまりない。(……) 彼(ユダヤ人)にとって、金はしばしば債券とか、小切手とか、銀行預金とかの抽象的形態をとる。従って、ユダヤ人が執着するのは、金の感覚的形象ではなく、その抽象的形態なのである。(……) ただ、ユダヤ人が、何よりもその形態を好むのは、それが普遍的だからである。」

こう述べた後、サルトルはこの論理が悪循環を導き出してしまう事実を指摘する。ユダヤ人の論理が貫徹され、ユダヤ人が富裕であればあるほど、反ユダヤ主義は「本当の所有が、法的なものではなく、所有物に対する心身の適応であると強調する傾向に向かう。」

これに対し、ユダヤ人は唯一の所有形態は、購買によって得られる法的所有であることを主張する。ユダヤ人が「金力を強調するのは消費者の権利を、それに同意しない共同体の中で、守りつづけるためであり、また同時に、所有者と所有物との関係を理性化して、所有を理性的宇宙観の枠の中へ入れるためでもある。」

したがって、ユダヤ人が「金に抜け目のないこと」と、金離れのよさを両立させているケースが多く見受けられるのも、人間と物品の間に、「理性的・普遍的・抽象的な関係しか認めまいとする強い決心のあらわれであるにすぎない」と結論する。

ゴブセックやマギユスの金銭に対する態度もこうしたサルトルの見解により、かなりうまく説明できるように思われる。

バルザック自身、ずいぶん多くのユダヤ人に対する偏見にとらわれていた

にもかかわらず、ユダヤ人の世界観の根底にあるものを相当程度見抜いていたように思われる。

普遍的、抽象的な思考に基づく世界観を提示できれば、ユダヤ人が長い間苦しんできた民族差別もその理論的根拠を失うことになる。

「もし理性が存在するならば、フランス的真実と、ドイツ的真実があるということはない。黒人的真実とかユダヤ的真実があるわけでもない。(……) 普遍的・永遠的法則の前では、人間自身も普遍的である。(……) 普遍の場まで高められれば、人間達の間には、常に同意が可能である。」(サルトル)

ユダヤ人の理性主義は普遍を求める情熱であり、人種という観念を排除するために仕組まれた世界観なのである。ユダヤ人が科学の分野をはじめとする文化的領域において目覚ましい活躍を示すのも彼らの普遍志向によるものだ、といってみたい気持ちにさせられるのは筆者ばかりではないのではないだろうか。

バルザックがゴブセック、マギュスらを通して描き出そうとした人物たちはここまで明確な目的意識を持っていたようには見受けられないけれども、こうした方向に向かって一歩歩み出していたことは間違いないように思われる。

世界に少数民族がどの程度存在するのかはともかく、ユダヤ人ほど喧伝される少数民族はない。ジプシーと呼ばれる人々、また現代ではイラクやトルコとの関連でしばしばその名前を聞くようになったクルド族、などの名前も知らない人のほうが少なくなったかもしれない。またわが国にはアイヌ人がいる。また在日韓国人やその他のアジア各国からの長期滞在者もその名(少数民族)で呼ばれる資格があるものと思われる。

いずれも差別や迫害の対象になりやすい立場や境遇におかれた人々であるが、その中でもユダヤ人ほどの苛烈な試練に耐えてきた少数民族はほかに存在しないといっても過言ではない。もちろん今日までに絶滅してしまった少数民族もあるかもしれないので正確な把握は困難であろうが、少なくとも現在存在する民族の中ではそのように断言できるのではないだろうか。

バルザックはフランス革命により大幅に活動の自由を認められたユダヤ人の台頭を見逃さなかった。その見方は従来からの偏見を多く残しながらも長所をも見落とすことなく記述している、と言っても過賞ではないと思われる。とりわけ新たに勃興しつつあった資本主義に棹差していた人々のことは幾分の批判や偏見に曇らされながらも、共感を持って描いている。これに対し、中世以来のユダヤの伝統のままに生きているユダヤ人たちに対する視線はかなり厳しいものがある。

頑ななまでに自らの伝統に忠実に生きるものには厳しく当たらざるを得ないということになると、今日イスラム教徒を多く抱えたフランス社会に彼が生きていたらどのような態度を表明するか、いささか興味をかきたてられる。完全な同化を求めるのか、そのまま受け入れるのか、という問題はこれからのわが国にとっても他人事とはいえない問題だからである。